# 水の文化 舟運気分（モード）

斎藤善之「全国市場を支えた船・商人・港」

高橋美貴「三陸水産資源盛衰史」

編集部「商人の港、日本橋界隈」

水の文化楽習実践取材
「八丁味噌 社史からわかる老舗の知恵」

宇佐美英機「近江商人の陸の商い」

深沢克己「沿海岸港と河口内港」

川上麻衣子「スウェーデンの水景色」

古賀邦雄　水の文化書誌「河川舟運」



水の文化 February 2007 No. 25

水の文化 2007 25

## ミツカン 水の文化センター

表紙上：船には、当たり前のことだがブレーキがない。大型タンカーは停泊地の何十kmも前から、全速後進をかけるという。
だから海事に携わる人間は、先を読み、判断を誤らないように全身全霊をかけて思慮深くあろうと努力する。
陸上にあっても一人ひとりが、そういう気持ちでいたいものだ。

表紙下：「板子一枚下は地獄」。常に危険と隣り合わせの船上では、自然と信心が育まれる。
ビルの谷間に埋もれそうな神社にも、かつての魚河岸や廻船問屋が寄進した痕跡が残っている。日本橋堀留の常盤稲荷。

裏表紙上：横浜駅に隣接するシーバス乗り場は、日曜日ともなると冬でも大変な賑わいだ。このシーバスの人気は、
水辺からアプローチしやすい魅力的なポイントをつなぎ、陸と船の道をつなげているからに違いない。

裏表紙下左：千石船の発達で大切なもののひとつに、舵がある。手漕ぎ動力から帆走専用船へ移行するに従い、
舵は面積を増やし、形を変えていった。滑車で舵を吊り上げるのは、吃水への対策だけではなく、
波浪が厳しいときに舵が破損してしまうのを防ぐためでもあった。

右：日和山から石巻の港外を望む。天気の良い日は、水平線まで見渡せるが、
レーダー機器がない江戸時代、霧に覆われたときなどは一体どうしていたのだろうか。